

## 会員の広場



### 民謡こぼれ話

藤井 誠（東京）

私は島根県松江市の出身で民謡を趣味としている。民謡の曲数は一説によると5万8000曲あるとのことだが、担い手の高齢化が進み勢いを失いつつある。このような民謡に少しでも興味を持っていただきたく、二つの話題を取り上げてみた。

先に述べた保存会の踊り部門には約10000名が登録されているが、地元である島根、鳥取の両県の会員は約2割である。そのほかの山陽・四国に3割、関西・東海に2割弱、東京に3割強というのが現在の「どじょうの会の分布」である。

### 津軽三味線

津軽三味線は従来の民謡の枠を超えて、海外まで拡大している。民謡の三味線は唄の伴奏として発達してきたものであるが、津軽三味線は弦楽器として独自の自己主張を行い主要楽器となったものである。

他の民謡にできない変化をもたらしたのは、津軽の風土と関係する。

一つには、津軽三味線は盲目の芸人、ゴゼ

### どじょう掬い

正調のどじょう掬いは、民謡のなかで最も知られている安来節の一部分。安来市長が会長を務める保存会により、踊り方、衣装・所作などが決められている伝統芸である。

踊り方にも、実際にどじょうを捕らえる仕事を強調する高山流と、お座敷での舞踏を取り入れた砂川流の二つの流れがある。

この二つの流派は使用する筈の形状も異なっている。ちなみに、鼻に付けるのは割り箸や五円玉ではなく、江戸時代の一文銭を使うのが決まりである。

この踊りはローカル色が強く、盛んなのは地元の山陰地方と思われるが、実は都会へ急速に進出しているのである。

や座頭が門付けで奏でていたものから発展した。北国の屋外での演奏に耐えるように頑丈につくられている。そのため速いテンポで力強く弾くことができるのである。ちなみに、三味線の皮は一般には猫であるが、津軽に用いるのは犬である。

もう一つには、津軽じょんがら節に代表される津軽の民謡には、唄と同時に三味線の演奏を楽しむもうと「前弾き」（前奏）があったことである。ほかの民謡の前弾きは長くとも30秒程度であるが、津軽の場合は長くと3分以上かかることもある。弾き手は独特のテクニクを駆使して個性をアピール、さまざまな技を磨いてきた。この前弾きが独立して広がったのが、現在の津軽三味線である。